

緑地西橋（旧心齋橋）

りょくちにしばし（きゅうしんさいばし）

平成2年、花と緑の博覧会が開かれた鶴見緑地の西端に、緑地西橋という橋がある。この橋が現存する日本最古の鉄の橋である。厳密にいうと、橋の本体はごく最近の鋼桁橋であるが、その外側に置かれた弓形をした部分が、明治6年（1873）にドイツから輸入されて心齋橋として架けられたものであることが確実視されている。「である」と断定しなかったのは、証拠となる記録を欠いているためである。しかし、橋の寸法や当時の写真との比較、また大阪市で橋を担当していた人達が書いた文章などを参考にして、旧心齋橋に間違いはないと考えられている。

明治の文明開化の波に乗って、大阪では次々と鉄の橋が架けられた。まず、明治3年（1870）に高麗橋が鉄橋になった。この橋は錬鉄製の桁橋で、長崎のくろがね橋、横浜の吉田橋に次いで、全国で3番目の鉄橋であった。次いで、5年に新町橋が鋳鉄製のアーチとなり、6年に心齋橋がボーストリングトラス形式の鉄橋となった。材料は確かめられていないが、おそらく錬鉄であろう。

心齋橋筋は江戸時代から大阪で最もにぎやかな通りの一つであったため、いち早く鉄橋が採用されたのであろう。当時の木橋のスパンは長くても10m程度であったから、橋長36.7mで川を一跨ぎする橋は大変珍しかった。アーチ型の橋を組み立てているのを見た当時の大阪の人々は、「住吉さんの太鼓橋のようなもんを架けるんかいな」と思ったそうである。できあがってみると、橋面が平らになっていたのだからさらに驚いたという。

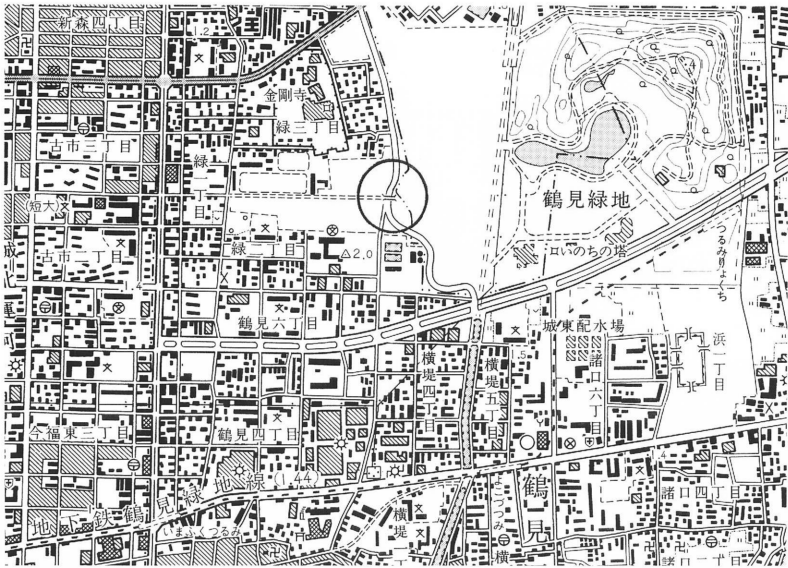
明治初期の東京では、永久橋として多くの石橋が採用されているが、それは当時の政府の要人が九州にあった石橋の技術を用いることに熱心であったためであるといわれている。しかし、大阪では江戸時代から橋は町人が架けてきたため、橋の形式の選択に制約がなく、自由に鉄橋を選ぶことができたものと思われる。これはまた、「新しもんがり」という大阪人気質につながるものであるともいえる。

鉄製の心齋橋は明治41年（1908）末、新しい石造アーチ橋に架け替えられるために撤去された。その後、詳しい年月日はわからないが、^{さかいがわ}境川運河の境川橋に転用された。そして、昭和3年には大和田川の^{ちぶね}新千船橋へと場所が移される。その川も昭和30年代には埋め立てられることになり、橋も撤去される運命となったが、明治初期の貴重な橋を残そうという人々の声に守られて、公園のなかで第二の人生を歩むことになった。

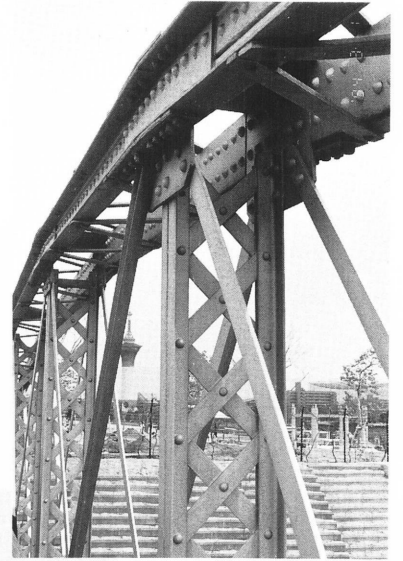
最初は、同じ鶴見緑地のメインストリートにあたる^{すずかけ}篠懸橋として、昭和48年8月にその姿が整えられた。その後、鶴見緑地の大幅な改造にともなって、新しい場所に移され、橋の名前も新しくなった。いずれも新橋の両脇に、独立して主構だけを架け渡した、いわば記念物展示のような形であるが、明治の古い歴史を今に伝えてくれている貴重な文化遺産であるといえよう。

〔MH〕

竣工年月：平成元年（1989）3月
所在地：大阪市鶴見区
跨越対象：道路
橋長・幅員：29.5m×8.0m（新しい桁橋部分）
径間数・支間長：1×36.13m（旧心齋橋の主構部分）
形式：ボーストリングトラス（同上）
備考：明治6年ドイツから輸入



(1:25,000 大阪東北部)



<1994年3月, 撮影・いづれも松村 博>